

〔論 文〕

# 生産的労働についての一考察

馬 場 雅 昭

## 目 次

はじめに

### I. 生産的労働の本源的規定（一般的規定）

1. 現在支配的に行われている生産形態
2. 生産的労働の本源的規定（一般的規定）
3. 協業による生産的労働概念の拡大
4. 「流過程に延長された生産過程」における生産的労働の概念

### II. 生産的労働の歴史的規定（特殊・資本主義的形態規定）

1. 資本制の生産過程における生産的労働概念の「狭小化」

### III. 二つの規定の相互関係

1. 生産一般
2. 普遍性・一般性と特殊性
3. 普遍性・一般性と特殊性・個別性
4. 労働過程と価値増殖過程
5. 生産的労働一般と特殊・資本制の社会における生産的労働

結びにかえて

## はじめに

生産的労働についてのマルクスの叙述は、『資本論』第4巻に予定されていた手稿『剰余価値学説史』の第4章「生産的および不生産的労働にかんする諸学説」と「補遺」の12「資本の生産性 生産的および不生産的労働」、および『資本論』第1巻のための準備的手稿『直接的生産過程の諸結果』の「生産的労働と不生産的労働」の項目という3つの手稿でまず展開されている。その研究成果をふまえ『資本論』第1巻第5章、および第14章において、生産的労働のいわゆる「本源的規定」・「一般的規定」と「特殊・歴史的＝資本主義的形態規定」との2つの規定が最終的に定式化されている。

ところが、これら2つの規定の関係について、マルクスの叙述は必ずしも系統だって展開されていないように思われる。2つの規定に「矛盾」があるとすれば、マルクスの方法に即して、統一的に把握されなければならないのは言うまでもないことである。

戦後我国においても、生産的労働について幾多の論争がなされてきた。この論争に参加した論者もかなりの数にのぼり、その専門分野も経済原論、国民所得論、経済学説史、商業経済論、経営経済学、交通論等々多岐にわたった。この論争は、戦後のマルクス経済学における大きな論争の一つになったと言

ってよい。ところが、その論争も一段落したかのように思われる。それは、理論的到達点に達したのであろうか。そう言えるとすれば、一体どのようなことが解決されたのであろうか。また、今後に残された課題はないのであろうか。

「生産的労働とは何か」を論じる前に、明確にしなければならないことがある。その第1は方法論の問題である。それは、使用価値を生産するという側面の労働（生産的労働の一般的規定・本源的規定）と剰余価値を直接生産する労働（生産的労働の特殊・歴史的形態規定）との関係、両者の統一と言う時の「統一」とは如何なる意味か等である。次に労働の対象化、物質化とは何か等々である。本稿では、方法論の問題を中心に進めたい。物質的財貨の生産過程における労働を中心に考察し、サービス労働の分析には立ち入らない。むしろ、その準備としたい。

## I. 生産的労働の本源的規定（一般的規定）

### I-1. 現在支配的に行われている生産形態

使用価値と価値という対立物の統一たる商品の生産過程は「労働過程と価値形成過程の統一<sup>1)</sup>」である。ある点を越えて延長された価値形成過程は「価値増殖過程<sup>2)</sup>」と呼ばれる。資本の直接的生産過程はいうまでもなく「労働過程と価値増殖過程の統一」であり、それは「資本制の生産過程・商品生産の資本制の形態<sup>3)</sup>」である。

この過程で資本家は、生産手段と労働力を購入しこの両者を結合させ、「使用価値ばかりでなく、商品<sup>4)</sup>を、使用価値ばかりでなく価値を、しかも価値ばかりでなく剰余価値をも、生産しようとする。」

資本家が労働力を商品として購入するのは、使用価値を使用価値そのもののために生産するためではない。使用価値はこの場合、それが「交換価値の物質的基体すなわち担い手であるが故にのみ、またその限りでのみ生産されるのである。<sup>5)</sup>」言い換えれば、資本制の生産は一定の使用価値に対して、その生産する商品の特殊性に対しては「絶対的に無関心」である。資本制の生産にとっては「剰余価値を生産すること、労働の生産物において一定分量の不払労働を取得すること、だけが問題<sup>6)</sup>」なのである。

つまり、資本制の生産様式・ $G - W \cdots P \cdots W' - G'$ は「使用価値ではなく交換価値が運動の規定的自己目的であることを表現する。価値の貨幣姿態は価値の自立的で手にとりうる現象形態であるからこそ、現実の貨幣を出発点および復帰点とする流通形態 $G - G'$ は、資本制の生産の推進的動機たる金儲けを手にとるように表現する。」それ故に、生産過程は「金儲けのための不可避的中間項—必要悪—としてのみ現象する<sup>7)</sup>」のである。

このように資本制の生産のもとでは、使用価値の生産は剰余価値生産の手段にすぎず、労働者が自己の労働の帰属者たる「資本家の統制のもとで労働」し、その生産物が「資本家の所有物であって、直接的生産者たる労働者の所有物ではない<sup>8)</sup>」としても、その生産の一般的性格は変わらない。つまり、資本制の生産過程は、あらゆる社会に一般的に共通な人間生活の物質的基礎である使用価値の生産を資本による商品生産として、すなわち価値形成および剰余価値の生産という形態をとおして行われるものである。

### I-2. 生産的労働の本源的規定（一般的規定）

それ故、生産的労働の分析はまず生産の資本制の形態から独立に、つまり生産そのものの一般的性格についての分析からはじめなければならない。マルクスは次のように述べている。

「使用価値または財の生産は、それが資本家のために資本家の統制のもとで行われることによつ

ては、その一般的本質を変じはしない。だから労働過程は、さしあたり、どの規定された社会的形態にも係わりなく考察されるべきである。<sup>9)</sup>」

「労働過程—吾々がその簡単で抽象的な諸契機において叙述してきたような労働過程は、使用価値を生産するための合目的な活動であり、人間の欲望のための自然的なるものの取得であり、人間と自然との間の質料変換の一般的な条件であり、人間生活の永遠的な自然条件であり、したがってまた人間生活のどの形態からも独立したものであり、むしろ、人間生活のすべての社会形態に等しく共通したものである。<sup>10)</sup>」

どの生産形態・生産様式からも独立した労働過程とは、どのようなものであろうか。それは「使用価値を生産するための合目的活動」、「人間と自然との間の質料変換の一般的な条件」であるという。この労働過程の簡単な諸契機は「合目的な活動または労働そのもの、その対象、およびその手段<sup>11)</sup>」である。「使用価値を生産するための合目的活動」である労働過程において、人間は労働手段によって労働対象に働きかけ、その労働対象を変化させる。この労働過程の成果として生産物が生産される。したがって、

「もし人が、全過程（労働過程のこと—引用者）をその成果たる生産物の立場から考察するならば、労働手段と労働対象とは共に生産手段として現象し、労働そのものは生産的労働として現象する。<sup>12)</sup>」

これが、歴史的に規定された特殊的形態から独立した生産的労働の本源的・一般的規定である。ところが、「生産的労働のこうした規定は単純な労働過程の立場から生ずるのであって、資本制的生産過程のためには決して充分でない<sup>13)</sup>」という注が付けられている。「単純な労働過程の立場から生ずる」生産的労働のこの規定は「生産物の立場から考察」されたもので、労働過程の生産物は「一の使用価値であり、形態変化によって人間の欲望に適合させられた一自然質料<sup>14)</sup>」である。

したがって、生産的労働の本源的・一般的規定とは、使用価値を生産する労働のことであり、使用価値の生産は、生産の歴史的形態とはなんの関係もない。それ故、生産的労働の一般的規定は、どの生産様式にも等しく共通するもので、労働の歴史的形態とは直接的にはなんの関わりもない規定なのである。

### I-3. 協業による生産的労働概念の拡大

資本制的生産過程において本源的な意味での生産的労働の概念を理解するには、2つの点に留意しなければならない。第1には、資本主義のような一定の規模に達した協業にもとづく生産過程では、頭脳労働と肉体労働との分離・対立が生じ、監督、技師などの労働が必要になり、「生産」に直接「みずから手を下すことはもはや必要ではない」技師等の頭脳労働が生まれる。これらの労働も生産的労働の規定にふくまれ、その概念が拡大するという点である。つまり、

「……労働過程そのものの協業的性格とともに、必然的に、生産的労働の・およびその担い手たる生産的労働者の・概念が拡大する。生産的に労働するためには、みずから手を下すことはもはや必要でない。全体労働者の器官となって、そのなんらかの細目機能を行えば充分である。さきに述べた生産的労働の本源的規定は、物質的生産そのものの本性から導き出されたものであって、全体

として考察された全体労働者については、依然として真である。だがそれは、個々にとり上げられた全体労働者の各成員については、もはや当てはまらない。<sup>15)</sup>」

協業はマニファクチャーにおいて発生し、機械制大工業において完成する。協業とは「同じ生産過程において・または相異なっているが連絡のある諸生産過程において・計画的に相並び相共に労働する多数者の労働の形態<sup>16)</sup>」のことであり、そこでは、生産手段の節約、生産に要する労働時間の短縮等が可能<sup>17)</sup>になるため、生産力が急激に上昇する。

労働過程が純粹に個人的な過程として行われる場合には、同じ労働者の中に後には分離されるすべての諸機能が結合されており、そこでは「頭の労働と手の労働とを合一<sup>18)</sup>」していた。ところが、協業形態が発生し、生産が大規模化すると、調整、指揮を司る労働が必要となってくる。このことは、次のように述べられている。

「およそ、大きな規模で行われる直接に社会的または共同的な労働は、多かれ少なかれ或る指揮を必要とするのであって、この指揮により、個別的諸活動の調和が媒介される……<sup>19)</sup>」

「直接的生産過程が、社会的に結合された過程の姿態をとっていて、自立的生産者たちの個々別々の労働としては現れない場合には、つねに監督および指導という労働が必然的に生ずる。だが、この労働は二重性のものである。一面では、多数の個人が協業するすべての労働では、過程の連絡と統一とは、必然的に、オーケストラの指揮者の場合のように、一つの指令的意志において、また諸々の部分労働でなく作業場の総活動に関する諸機能において、現われる。これは、どんな結合的生産様式においてもなされねばならぬ一つの生産的労働である。<sup>20)</sup>」

生産の協業化にともない、指揮・監督・管理等の労働が必要となり、これらの労働も本源的（一般的）規定で生産的労働であることが明らかになった。生産的に労働するためには「みずから手を下すことはもはや必要ではない。全体労働者の器官となってそのなんらかの細目機能を行えば充分である。<sup>21)</sup>」つまり、精神的活動の発揮であっても、狭義の生産に直接タッチしなくても、広義の生産に関わり合えば、それで生産的労働の本源的規定・一般的規定に包摂されるというのである。また、狭義の生産に直接手を下さない労働手段の補修・点検、運搬、清掃の労働等、あるいは「たんなる下ばたらき<sup>22)</sup>」等であっても生産的労働であるというのである。

資本制の生産過程における指揮・監督・管理等の労働は、一定の条件付きの下では生産的労働の概念に含まれるが、他方、「資本の機能」、「搾取の機能」をその本質とすることにも留意しておく必要がある<sup>23)</sup>。つまり、

「指導・監督および媒介というこの機能は、資本に従属させられた労働が協業的となるや否や資本の機能となる。<sup>24)</sup>」

「価値増殖過程にある資本—生産的資本—の代表者としての資本家は、生産的機能を遂行する。それはまさに生産的労働を監督し搾取することを本質とする。……労働過程の指導者としての資本家は、彼の労働が生産物に体现される総労働過程にふくまれるという意味で生産的労働を遂行することが出来る。<sup>25)</sup>」

ここで、2つのことを小括しておこう。「労働過程の……協業的性格とともに……生産的労働の……概念が拡大する」、つまり、労働手段の補修・点検等、あるいは生産過程の「たんなる下ばたらき」等であっても、生産的労働であるというのである。また「直接的生産過程が社会的に結合された過程」を取るようになると、「つねに監督および指導という労働が必然的に生ずる。」ここでいう「監督・指導」という労働は、一方では「オーケストラの指揮者」の場合のように「どんな結合的生産様式においてもなされねばならぬ……生産的労働である」。

このことが、一方の理論構成である。

他方の理論構成は、注、24)、25)での引用における理論である。つまり「指導・監督……というこの機能」は、労働が協業的となり資本に従属されるようになると「資本の機能となる」という点である。

協業にもとづく生産過程で「つねに監督および指導という労働が必然的に生ずる。だが、この労働は二重性のものである」というのは、この意味においてである。

#### I-4. 「流通過程に延長された生産過程」における生産的労働の概念

本源的な意味での生産的労働を把握する際に、留意しなければならない第2の点は次のことである。資本主義のような一定の社会的分業、および生産力の発達した生産段階においては、運輸、保管、荷造等の行為は流通と不可分に結び付いているが、「流通過程に延長された生産過程」・「流通形態によって隠蔽されているにすぎない生産過程<sup>26)</sup>」である。この過程で遂行される労働は、感性的には直接に対象物を形成しないとはいえ、使用価値の一種たる「有用効果<sup>27)</sup>」を生産する。それは、本源的な意味で生産的であるというのである。

これらの過程で遂行される労働は、ちょうど生産過程で遂行される「技師」、運輸、労働手段の補修・点検、清掃、「たんなる下ばたらき」等の労働が「全体労働者の器官となって、そのなんらかの細目機能を行えば充分である<sup>28)</sup>」のと同様に生産的であるというのである。

「流通過程に延長された生産過程」に従事する労働が、何故に、またどの程度まで生産的であるかは、『資本論』第2部第6章「流通費」の研究によって明らかにされている<sup>29)</sup>。

## II. 生産的労働の歴史的規定（特殊・資本主義的形態規定）

これまで、労働過程は資本制的形態から独立した状態で考察した。

それは「使用価値を生産するための合目的な活動」・「人間生活のどの形態からも独立したもの」であり、労働過程は「人間生活のすべての社会形態に等しく共通したもの」であった。それ故、「労働者を他の労働者たちとの関係において叙述することは、その必要がなかった<sup>30)</sup>」のである。しかし人間は、自然に働きかける際に一人で、孤立した人間として働きかけるわけではない。共同で、集団をなし働かせるのである。つまり、

「生産において人間は、自然に働きかけるばかりでなく相互にも働きかける。彼等はただ一定の仕方では協働し、また彼等の活動を相互に交換しあうことによってのみ、生産する。生産するためには、彼等は相互に一定の諸連関および諸関係を結ぶのであって、この社会的諸連関および諸関係の内部でのみ、自然にたいする彼等の働きかけが行われ、生産がおこなわれるのである。<sup>31)</sup>」

「人間は、その生活の社会的生産において、一定の、必然的な、かれらの意志から独立した諸関

係を、つまりかれらの物質的生産諸力の一定の発展段階に対応する生産諸関係を、とりむすぶ。<sup>32)</sup>」

それ故、生産的労働の本源的・一般的規定に引続き、その資本制的形態規定が考察されなければならない。資本制の生産関係の下においては、労働手段、労働対象は資本家によって所有されており、労働の主体的担い手たる労働者は生産手段を全く所有していないため、自己の労働力を資本家に販売し「資本家の統制のもとで労働する」ことを余儀なくされている。その当然の帰結として「生産物は資本家の所有物であって、直接的生産者たる労働者の所有物ではない。<sup>33)</sup>」

資本制の生産過程は「人間生活のすべての社会形態に等しく共通」する「使用価値を生産するための合目的な活動<sup>34)</sup>」を資本による商品生産として、すなわち価値形成、および剰余価値の生産という形態をとおして行われるのである。「剰余価値の生産が資本制の生産の規定的目的<sup>35)</sup>」であることも第Ⅰ章1節で指摘された。マルクスの表現によれば「資本制の生産過程は、社会的生産過程一般の歴史的に規定された一形態である。<sup>36)</sup>」

「単純な労働過程の立場から生ずる」生産的労働の規定（いわゆる本源的規定・一般的規定）から見れば、使用価値を生産する労働は生産的労働であった。資本制の生産は商品生産という形態をとって行われる。そこでは、資本家は「使用価値ばかりでなく、商品を生産し、使用価値ばかりでなく価値を、しかも価値ばかりでなく剰余価値をも、生産しようとする。<sup>37)</sup>」

それ故、労働者は一般的に使用価値を生産するというだけでは充分ではない。「単純な労働過程の立場」からなされた生産的労働の一般的規定が「資本制の生産過程のためには決して充分でない<sup>38)</sup>」と言うのはこのためである。

## Ⅱ－１ 資本制の生産過程における生産的労働概念の「狭小化」

生産的労働の一般的規定が「資本制の生産過程のためには決して充分ではない」のは何故であろうか。『資本論』第1巻第14章で詳しい説明がなされている。

「だが他方では、生産的労働の概念が狭小となる。資本制の生産は、商品の生産であるばかりでなく、本質的には剰余価値の生産である。労働者は自分のためにでなく資本のために生産する。だから、彼が一般的に生産するというだけでは、もはや充分でない。彼は、剰余価値を生産せねばならぬ。資本家のために剰余価値を生産する労働者、または資本の自己増殖に役だつ労働者のみが生産的である。<sup>39)</sup>」

これが生産的労働の本源的規定（一般的規定）にたいし、歴史的規定とよばれる規定である。歴史的規定とは、剰余価値を生産する労働が生産的労働であるという規定であり、それは価値増殖過程からの規定である。従って厳密には、特殊歴史的（資本主義的）形態規定と規定されるべきであろう。本源的規定・一般的規定と歴史的規定との相互関係は一詳しい展開は、第Ⅲ章に譲り一さしあたり、次のように言えるであろう。

本源的規定は超歴史的な自然法則の視点から見た一般的な規定であり、歴史的規定は歴史的な生産関係の視点から見た特殊な規定である。今後「一般的規定」、「特殊な規定」（あるいは「特殊歴史的・資本主義的形態規定」）という概念はこの意味で用いることとしたい。

周知のように、資本制の生産過程・商品生産の資本制の形態は「労働過程と価値増殖過程との統一<sup>40)</sup>」である。しかし「労働過程は価値増殖過程の手段にすぎず、価値増殖過程はそれ自身としては本質上剰余価値の生産、すなわち不払労働を対象化する過程である。<sup>41)</sup>」このことによって、生産過程の全性格

が特殊歴史的に規定される。したがって、資本制的生産における生産的労働の概念は次のように定義されている。

「直接に資本を増殖させ、いいかえれば剰余価値を生産し、したがって労働者すなわち労働の遂行者にたいしては等価物をあたえずに、剰余生産物にあらわされた剰余価値のなかに実現され……資本家にとっての商品の剰余増加分のなかに表現される労働が生産的である。<sup>42)</sup>」

「個々の商品についてみれば、そのある可除部分において不払労働を表現し、総生産物についてみれば商品総量のある可除部分において不払労働だけを、すなわち資本家にとっては費用のかからない生産物を表現する労働が生産的なのである。生産的労働を遂行する労働者は生産的で、直接的に剰余価値をつくりだす、すなわち資本の価値を増殖する労働が生産的なものである。<sup>43)</sup>」

以上明らかになったように、生産的労働の特殊歴史的形態規定とは「直接に剰余価値を生産する労働」、言い換えれば「直接に資本を増殖させる」労働のことである。それ故このような規定は、資本家の立場から与えられるのは言うまでもない。つまり、

「生産的労働と不生産的労働とは、ここではつねに労働者の立場からではなく、貨幣所有者・資本家の立場から [区別される]<sup>44)</sup>」のである。

### Ⅲ. 二つの規定の相互関係

一般的な意味での生産的労働とは「使用価値を生産する労働」のことで、生産の社会・歴史的形態を問わず遂行されなければならない労働のことである。他方、生産的労働の特殊・資本主義的形態規定とは資本に「剰余価値を直接生産する労働」のことである。このことは、第Ⅰ章、第Ⅱ章で明らかになった。さらに、生産的労働の概念が一方において「拡大」され、他方において「狭小」されることも明らかになった。

「拡大」と「狭小」という「矛盾」する事態が生ずるのは何故であろうか。

生産的労働の一般的規定・本源的規定とその特殊資本主義的・歴史的形態規定の関係をいかに把握すればよいのであろうか。マルクスが『経済学批判』序説で生産一般と生産の特殊・歴史的形態を分析した点と、労働過程と価値増殖過程を分析した点を手掛りに考察したい。2つの規定は「対立したものをその統一においてとらえること<sup>45)</sup>」、すなわち、対立物の統一という弁証法的関係において理解したい。

#### Ⅲ-1 生産一般

では、生産一般とはどのようなことであろうか。その概念が経済学で必要なのは何故か。それが特殊・歴史的な資本制的生産と区別されなければならないのは、何故であろうか。マルクスにその解答を求めよう。

「あらゆる生産過程について同一なものを、その特殊的差異から区別して固定することによって、同一性が証明されるのである。すなわち、差異を捨象することによって、同一性が証明される。<sup>46)</sup>」

「すべての時代の生産は、一定の特徴を共通にもっており、共通の規定をもっている。生産一般

とはひとつの抽象であるが、しかしそれは、共通のものを現実には浮きださせ、固定させ、それによってわれわれのくりかえす労をはぶくかぎりでは、ひとつの合理的な抽象である。……生産一般にあてはまる規定が区別されなければならないのは、まさに……同一性に気をとられて、本質的な差別が忘れられないためである。<sup>47)</sup>」

「すべての時代の生産は、一定の特徴を共通に持っており、共通の規定を持っている」というのは、使用価値を生産する労働、つまり「人間生活のすべての社会形態に共通したもの」「使用価値を生産するための合目的的な活動」のことである。生産一般についてのマルクスの叙述をふまえ、普遍性・一般性と特殊性の関係を確認しておこう。

### Ⅲ-2. 普遍性・一般性と特殊性

『資本論』の窮極の目的は「近代的社会の経済的運動法則を暴露すること<sup>48)</sup>」である。マルクスは、資本制的生産の法則を特殊・歴史的なものとして認識しようとしている。このような認識は、すべての社会に共通する一般性と特定の社会にのみ通用する特殊性との区別によってはじめて可能となる。

このことは、生産的労働の一般的規定と特殊的规定の関係についても同じことが言えるであろう。生産一般に共通する諸条件を問題にするのは、ただそれが資本制的生産の特殊性を明らかにするためである<sup>49)</sup>。

同一性は「差異を捨象することによって証明される」もの、一般的なものとは「比較によってえらびだされた共通なもの」のことである。それ故、生産一般とは「ひとつの抽象」である。資本制的生産が生産一般と区別されなければならないのは「同一性に気をとられて、本質的な差別が忘れられないためである。<sup>50)</sup>」

それ故、マルクスにおいて「比較によってえらび出された共通なもの」としての一般的なものは、頭の中で勝手に作り上げられたものではなく、経済学研究の方法である。このことをレーニンは次のように述べている。

「たんに抽象的な普遍ではなくて、特殊なもの、個体的なもの、個別的なものの豊かな内容（特殊なものと個別的なもののあらゆる豊かな内容？）を自己のうちに現している普遍<sup>51)</sup>」である。

普遍的なものとは「客観的現実性の個別的な諸対象や諸現象の特徴、性質、徴表の客観的に存在している共通性」のことであり、普遍性は「多くの多様な個別的なもののなかで反復されているものである。共通の徴表で性格づけられている諸対象のグループ、集まりもまた普遍的または一般的とよばれる。<sup>52)</sup>」

つまり、普遍的なものとは「実在的对象の、客観的に存在する一般性<sup>53)</sup>」のことであるから、レーニンの表現による「普遍」は、そのまま「一般」と言い換えてよい。

### Ⅲ-3. 普遍性・一般性と特殊性・個別性

では、この普遍的なもの・一般的なものは、特殊なもの・個別的なものとのどのような関係にあるのであろうか。『資本論』ではこの関係が縦横に使いこなされているが、端的に表現されたところはない。他にその説明を求めよう。

個別的なものとは「自然と社会のうちに存在する、単独の対象、単独の現象、過程、事件<sup>54)</sup>」のこ



とであり、特殊なものとは「ある関係では一般的であり、他の関係では個別的、単独的である。そのような諸対象のグループ<sup>55)</sup>」のことである。

一般的なものと同個別的なものとの関係についてレーニンは次のように述べている。

「対立しあっているもの（個別的なものは一般的なものに對立している）は同一である。個別的なものは、一般的なものへ通じる連関のうちにのみ存在する。一般的なものは、個別的なものの中にのみ、個別的なものによってのみ存在する。すべての個別的なものは（なんらかの仕方）一般的なものである。すべての一般的なものは、個別的なもの（その一部分あるいは一側面あるいは本質）である。<sup>56)</sup>」

このことは、生産一般と資本制の生産という特殊・個別との関係についても、生産的労働の一般的規定、特殊歴史的規定との関係についても同様のことが言えよう。つまり、資本制の生産でもない、封建制の生産でもない、奴隷制の生産でもない生産一般は存在しない。同様に、可変資本でもない、不変資本でもない資本一般なるものも存在しないのである<sup>57)</sup>。

たしかに、生産一般とは「ひとつの抽象<sup>58)</sup>」であり、すべての時代の生産がもっている「共通の規定」、共通の特徴である。しかしそれは「共通のものを現実に浮きださせ、固定させ、それによってわれわれのくりかえす労をはぶくかぎりでは、ひとつの合理的な抽象<sup>59)</sup>」である。

強調したい点は、マルクスの分析における普遍・一般がつねに特殊的・具体的・個別的なものを含み、それと必然的な連関をもった普遍・一般、それに必然的に発展するような普遍・一般であるということである。つまり、マルクスの抽象は「研究対象の特殊性を捨象しない。……そのうちに個別的なものと同特殊なものと同を豊かに含んでいる<sup>60)</sup>」抽象だということである。生産一般とは、資本制の生産、封建制の生産、奴隷制の生産という特殊な「個別的なもの」＝個別的生産様式のなかに、これらの「個別的なものを通してのみ存在する<sup>61)</sup>」生産なのである。

それ故、「個別的なものは、一般的なものへ通じる連関のうちにのみ存在する。一般的なものは、個別的なものの中にのみ、個別的なものによってのみ存在する<sup>62)</sup>」という指摘は、個別的なものは一般的なものを必然的に含むもの、一般的なものを含まない個別的なものはない、ということの意味する。

生産的労働の一般的規定と特殊歴史的形態規定との関係も、すでに述べた普遍・一般と特殊・個別の関係と同様に、把握しなければならない。

生産的労働の一般的規定と特殊規定との関係は「資本制の生産過程は、社会的生産過程一般の歴史的に規定された一形態である<sup>63)</sup>」「資本制の生産様式は、特殊の種類・独自の歴史的規定性をもつ・生産様式である<sup>64)</sup>」という方法論に即して理解しなければならないのである<sup>65)</sup>。

#### Ⅲ-4. 労働過程と価値増殖過程

商品の使用価値と価値との統一である。資本の生産過程が「労働過程と価値増殖過程の統一<sup>66)</sup>」であることは、すでにⅡ章において明らかになった。そして、商品において使用価値が価値の前提であったように、資本制の生産過程における労働過程は、価値増殖過程の前提である。したがって、資本制の生産過程における生産的労働は、資本制の生産過程そのものの持つ二重性に即して把握されなければならない。

さらに、資本制の生産の目的は「致富であり、価値の増殖であり、価値の増大であり、つまり旧価値の維持および剰余価値の創造である。<sup>67)</sup>」それ故、剰余価値を生産するという特殊資本制の形態規定こ

そがその本質的内容<sup>68)</sup>を規定する。特殊資本制的労働過程（価値形成過程および価値増殖過程）はいかなる社会形態にも共通する労働過程一般の特殊資本主義的形態のことであるから、生産的労働の二つの規定もこれに照応して理解しなければならない。つまり、

「生産過程の直接の結果である商品が、使用価値と交換価値との直接的統一であるように、生産過程は労働過程と価値増殖過程との直接的統一である。しかし労働過程は価値増殖過程の手段にすぎず、価値増殖過程はそれ自身としては本質上剰余価値の生産、すなわち不払労働を対象化する過程である。これによって生産過程の全性質が特殊的に規定される。<sup>69)</sup>」

このことから明らかなように、労働過程に即する一般的規定と価値増殖過程に即する特殊歴史的規定は、資本制の生産過程を基軸にして対立物の統一として把握されなければならないのである。言い換えれば、生産的労働の特殊資本制的形態規定こそが、資本制の生産過程における労働の全性質を特殊的に規定するのである。

### Ⅲ－5. 生産的労働一般と特殊・資本制の生産における生産的労働

一般的な意味での生産的労働とは「使用価値を生産する労働」のことであり、「資本制の生産過程のためには決して充分でない」規定であることは第Ⅱ章第1節で明らかになった。資本家は「使用価値ばかりでなく商品を生産し、使用価値ばかりでなく価値を生産し、しかも価値ばかりでなく剰余価値を生産しようとする<sup>70)</sup>」からである。労働者は生産手段を全く所有していないため、自己の労働力を資本家に販売し「資本家の統制のもとで労働する」のである。その結果「生産物は、資本家の所有物であって……労働者の所有物でない<sup>71)</sup>」こと、生産の規定的目的が剰余価値の生産である<sup>72)</sup>ことも明白になった。

資本制の生産過程は「人間生活のすべての社会形態に等しく共通」するところの「使用価値を生産するための合目的な活動<sup>73)</sup>」を資本による商品生産として、つまり価値形成および剰余価値の生産という形をとって行われるのである。それ故、一般的な意味での生産的労働は、資本制の生産様式の下では剰余価値生産という形態をとって存在するより他ないのである。生産的労働の特殊資本制的形態規定とは、資本制の生産のもとにおいては、一般的規定の特殊的形態の表現のことであると言えることが出来る。

資本制の生産過程という「個性・特殊性」が「社会的生産過程一般の歴史的に規定された（特殊的一引用者）一形態である<sup>74)</sup>」というのは、次のことを意味している。生産的労働の一般的規定は、資本制の社会のもとにおいては、特殊・歴史的（資本主義的）形態規定という「個別的なものの中のみ、個別的なものを通して存在する」ということである。

つまり、資本制の生産様式のもとにおいては、一般的な意味での生産的労働は、特殊・資本制の形態を通してしか表れない。このことは、資本制の形態規定＝特殊・歴史的規定は、本源的规定＝一般的規定を必然的に包摂しており<sup>75)</sup>、一般的規定を包摂しない特殊・歴史的規定はありえないことを意味しているのである。このことを抜きに、2つの規定における相互関係の把握は出来ないのである。

### 結びにかえて

戦後日本において生産的労働について幾多の論争がなされた。本稿ではこの論争における問題点の1つが方法論の問題、つまり生産的労働の本源的规定と特殊歴史的規定との相互関係の把握にあるとの認識に基づき、両規定の確認を試みようとしたものである。

まず第Ⅰ章では、一般的意味での生産的労働とは「使用価値を生産するための合目的的活動」(注10)のことであるという確認からはじまった。ところが、労働過程の協業的性格とともに「生産的労働の……生産的労働者の概念が拡大する」(注15)というのが第2の命題である。「技師、技術学者……たんなる下ばたらきとして労働する」(注15の注)ような労働者も「全体労働者の器官となって、そのなんらかの細目機能を行えば充分」(注15)生産的労働者であるという。

「流通過程に延長された生産過程」における生産的労働の概念については、第2の命題の延長で「運輸、保管、荷造り等」の労働も生産的労働であると確認した。ところが、微妙なのが監督、管理の「労働」である。「監督および指導という労働」の持つ「二重性」(注20)、つまり一面では「オーケストラの指揮者」(注20)の機能、もう一面では「資本の機能」「生産的労働者を監督し搾取する」(注24, 25)についてもマルクスの理論を確認した。以上が第Ⅰ章の要約である。

「生産的労働のこうした(使用価値を生産するということ—引用者)規定は単純な労働過程から生ずるものであって、資本制の生産過程のためには決して充分ではない」(注13)というのが、第Ⅰ章「生産的労働の本源的規定(一般的規定)」と第Ⅱ章「生産的労働の歴史的規定(特殊・資本主義的形態規定)」の結節点である。

第Ⅰ章第3節では協業により「生産的労働の概念が拡大」したのにたいし、第Ⅱ章では「生産的労働の概念が狭小となる」(注39)というのである。それは「資本制の生産は、商品の生産であるばかりでなく、本質的には剰余価値の生産である」「資本家のために剰余価値を生産する労働者……のみが生産的である。」(注39)第Ⅱ章のテーマはこのことに尽きる。

これ等のこと、つまり、生産的労働概念の「拡大」と「狭小」を矛盾なく、如何に統一的に把握するか、このことが第Ⅲ章の課題である。資本制の生産は「使用価値を生産するための合目的な活動」(注73)を資本による商品生産として、つまり価値形成および剰余価値生産という形をとおして行われるのである。それ故、一般的な意味での生産的労働は、資本制の生産の下では剰余価値生産という形態をとって存在するより他ないのである。

本稿で明らかになったことは、方法論の確認だけである。したがって、サービス労働が生産的労働であるかどうかの議論は、残された課題である。

## 注

- 1) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.195. 『資本論』 長谷部文雄訳 青木文庫 第2分冊 343ページ。以下、原書、訳本はすべてこれを用いる。訳文は長谷部氏のものを参照するが、必ずしもこれにとられるものではない。傍点—原文イタリック体。以下同様。
- 2) *Ebenda* Bd. I. S.203. 青木文庫 第2分冊 355ページ。
- 3) *Ebenda* Bd. I. S.206. 第2分冊 358ページ。
- 4) *Ebenda* Bd. I. S.194. 第2分冊 343ページ。
- 5) *Ebenda* Bd. I. S.194. 第2分冊 342ページ。
- 6) *Ebenda* Bd. III. S.222. 第9分冊 291ページ。
- 7) *Ebenda* Bd. II. S.52. 第5分冊 75～76ページ。
- 8) *Ebenda* Bd. I. S.193. 第2分冊 341ページ。
- 9) *Ebenda* Bd. I. S.185. 第2分冊 329ページ。
- 10) *Ebenda* Bd. I. S.192. 第2分冊 339ページ。
- 11) *Ebenda* Bd. I. S.186. 第2分冊 331ページ。
- 12) *Ebenda* Bd. I. S.189. 第2分冊 335ページ。馬場雅昭『流通費用論の展開』31ページ。

- 13) *Ebenda* Bd. I. S.189. 第2分冊 335ページ。傍線—引用者。以下—同様。  
 14) *Ebenda* Bd. I. S.189. 第2分冊 334ページ。  
 15) *Ebenda* Bd. I. SS.533～534. 第3分冊 804ページ。

より詳しくは、以下の通りである。

「……資本のもとへの労働の実質的包摂または特殊的・資本主義的生産様式の発展とともに、個々の労働者がではなく、社会的に結合された労働能力がますます総労働過程の実際の遂行者となり、協力しながら、総生産機構を形成する種々の労働能力は、商品形成の、ここではむしろ生産物形成の、直接的過程に多種多様な方法で参加し、あるものはより多く手で、あるものはより多く頭脳で労働し、あるものは管理人、技師、技術学者等として、あるものは監督として、あるものは直接の筋肉労働者またはたんなる下ばたらきとして労働するようになる……。工場を形成する総労働者を見れば、その結合された活動は物質的には、同時に商品総量である総生産物に直接に実現され、そのさいこの総労働者の一部にすぎない個々の労働者の機能が、直接の筋肉労働により遠いか、またはよりちかいかということは、まったくどうでもよいことである。」(マルクス『直接的生産過程の諸結果』『マルクス・エンゲルス選集』第9巻所収 大月書店 1954年 441～442ページ。以下—『マル・エン選集』と省略。『直接的生産の諸結果』国民文庫 1970年 111～112ページ。以下—『諸結果』と省略。傍点—イタリック体)

- 16) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.340. 青木文庫 第3分冊 548ページ。  
 17) *Ebenda* Bd. I. SS.339.～344. 第3分冊 546～553ページ。  
 18) *Ebenda* Bd. I. S.533. 第3分冊 803ページ。  
 19) *Ebenda* Bd. I. S.346. 第3分冊 555ページ。  
 20) *Ebenda* Bd. III. SS.418.～419. 第10分冊 544～545ページ。  
 「監督および指導という労働」の「二重性」については、注23)～25) 参照のこと。  
 21) *Ebenda* Bd. I. S.533. 第3分冊 804ページ。注15) 参照。  
 22) マルクス 『諸結果』『マル・エン選集』442ページ。『諸結果』国民文庫 111～112ページ。  
 23) 橋本 勲教授は「物質的生産の内部で労働過程の指揮・監督のために生ずる精神的労働」を生産的労働の「一般的規定」から生産的労働とした後、「歴史的規定」においても生産的労働と規定されている。(「サービス労働の生産的性格」47～49ページ)

橋本教授の見解は、労働過程内部における指揮・監督労働の一面だけを強調したきらいがあり、必ずしも正確ではないように思われる。管理・監督労働の持つ「二面性」にてらして再検討されなければならない。さしあたり、以下を参照のこと。

- ・ *Das Kapital* Bd. III. S.419. 青木文庫 第10分冊 545ページ。
- ・ *Ebenda* Bd. I. SS.346.～347. 第3分冊 555～556ページ。
- ・ *Ebenda* Bd. III. SS.422.～423. 第10分冊 549～550ページ。
- ・ *Ebenda* Bd. III. S.422. 第10分冊 548ページ。
- ・ Karl Marx *Theorien über den Mehrwert*. Bd. III. SS.347.～348. 国民文庫 第8分冊 208ページ。以下、*Theorien* と省略。
- ・ Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』452～453ページ。国民文庫 125ページ。

詳しくは、角谷登志雄『労働と管理の経済理論』青木書店 1969年 参照。

- 24) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.346. 青木文庫 第3分冊 555ページ。  
 25) マルクス 『諸結果』『マル・エン選集』452～453ページ。『諸結果』国民文庫 125ページ。詳しくは、注15) 参照のこと。  
 26) Karl Marx *Das Kapital* Bd. II. S.131. 第5分冊 177ページ。

- 27) *Ebenda* Bd. II. S.50. 第5分冊 73ページ。
- 28) *Ebenda* Bd. I. S.533. 第3分冊 804ページ。
- 29) 馬場雅昭 『流通費用論の展開』。
- 30) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.192. 第2分冊 339ページ。
- 31) Karl Marx 『賃労働と資本』長谷部文雄訳 岩波文庫 1961年版 46～47ページ。1984年版 57ページ。
- 32) Karl Marx 『経済学批判』武田・遠藤・大内・加藤訳 岩波文庫 13ページ。
- 33) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.193. 青木文庫 第2分冊 341ページ。
- 34) *Ebenda* Bd. I. S.192. 第2分冊 339ページ。
- 35) *Ebenda* Bd. I. S.238. 第2分冊 403ページ。Bd. III. S.937. 第13分冊 1239ページ参照。
- 36) *Ebenda* Bd. III. S.871. 第13分冊 1153ページ。
- 37) *Ebenda* Bd. I. S.194. 第2分冊 343ページ。
- 38) *Ebenda* Bd. I. S.189. 第2分冊 335ページ。馬場雅昭 『流通費用論の展開』 31～35ページ参照。
- 39) *Ebenda* Bd. I. S.534. 第3分冊 804ページ。
- 40) *Ebenda* Bd. I. S.206. 第2分冊 358ページ。
- 41) Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』380ページ。『諸結果』国民文庫 34ページ。
- 42) Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』440ページ。国民文庫 110ページ。傍線—引用者。
- 43) Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』441ページ。国民文庫 110～111ページ。
- 44) Karl Marx *Theorien* Bd. I. S.121. 第1分冊 217ページ。国民文庫 第2分冊 19ページ。
- 45) レーニン 『哲学ノート』松村一人訳 岩波文庫 第1分冊 33ページ。
- 46) Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』368ページ。国民文庫 20ページ。
- 47) Karl Marx 『経済学批判』岩波文庫 289～290ページ。295, 322ページ参照。馬場雅昭 『流通費用論の展開』 33～35ページ参照。
- 48) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.7. 第1分冊 73ページ。
- 49) 河上 肇 『経済学大綱』角川文庫 上巻 22～23ページ。
- 50) Karl Marx 『経済学批判』 289～290ページ。
- 51) レーニン 『哲学ノート』 第1分冊 34ページ。
- 52) ローゼンターリ 『カテゴリー論』寺沢・林・野中訳 下巻 336ページ。
- 53) ソ連邦科学院哲学研究所 『哲学教程』森・寺沢訳 第2分冊 337ページ。
- 54) ローゼンターリ 『カテゴリー論』青木書店 下巻 335ページ。
- 55) ローゼンターリ 『カテゴリー論』下巻 336ページ。

個別的なものと特殊なものとの関係は、次のような例を引き合いにだして説明されている。

「樹木は一般的である、というのは、きわめて多数の単独の、個別的な樹木—かつ葉樹、針葉樹—を統一しているから。しかしこの一般的なものは、それ自身が単独のもの、個別的なものとして植物のグループにはいり、このグループには樹木の他に、草、灌木、きのこ等々もはいる。つまり、樹木はある関係では一般的であり、他の関係では単独である、そしてこれらの二つの性質が同時に存在することによって、樹木は『特殊的なもの』となっている。」(ローゼンターリ『カテゴリー論』下巻 336ページ)

ついでに、個別的なものと普遍的なもの・一般的なものとの関係について、ヘーゲルの見解も確認しておこう。

「個別的なものは、同様にまた個別的なものではなくて普遍的なものである。」(ヘーゲル『小論理学』松村訳 岩波文庫 下巻 212ページ—但し訳文は『哲学ノート』松村訳—)

ところが、その関係は「……普遍は個別的なものの土台であり根底であり実体である。」(同上書 150～151ペ

ージ)「概念は真に最初のものであり、さまざまの事物は、それらに内在し、それらのうちで自己を啓示する概念の活動によって、現にそれらがあるような姿を持っている。」(ヘーゲル 同上書 130ページ)

ヘーゲルにあつては、概念とは事物の抽象的反映ではないのである。観念が第1次的なもの、事物が第2次的なものとして把握されている。ヘーゲルのこの弁証法はなんとしても、現実 に即して唯物論的に焼き直されなければならない。

56) レーニン 『哲学ノート』第2分冊 199ページ。

57) 「資本一般の概念は、不変資本、可変資本のどちらでもない第三者としての実体、本質をいうのではない。……そうしたすべて特殊とは別のものとしての一般ではなく、正体のはっきりした、可変資本として、一つの特殊として実在するものである。しかし、特殊ではあるが、可変資本は、資本をまさに資本たらしめる主要なモメントであつて、不変資本は補助的なモメントである。」(見田石介 『資本論の方法』 200ページ)

58) Karl Marx 『経済学批判』 289ページ。

59) Karl Marx 『経済学批判』 289～290ページ。

60) ローゼンターリ 『資本論の弁証法』飯田訳 下巻 333ページ。

61) ローゼンターリ 『資本論の弁証法』 下巻 338ページ。

ローゼンターリ 『カテゴリー論』 下巻 351ページ。

62) レーニン 『哲学ノート』第2分冊 199ページ。

63) Karl Marx *Das Kapital* Bd. III. S.871. 第13分冊 1153ページ。

64) Karl Marx *Ebenda* Bd. III. S.934. 第13分冊 1236ページ。

65) 個別、特殊、一般は次のように説明されている。

「具体的な事物は、ふつう個別的と考えられている。かような個別的な存在には本質的なもののほかに偶然的な非本質的なものがまわりついている。たとえば資本主義国家としての日本がそれである。ところで……かような個別の本性をとらえねばならないが、それには個別存在からその非本質的なものをとりのぞき、その本質的な側面・要素を、純粋な形でとりださねばならぬ。これは個々の国にあらわれた資本主義にたいして、資本主義の一般的な本質である。これは個別的なものの一面をあらわしたにすぎぬ抽象的なものであるが、個別の本質をよく反映し、それを説明し理解させるところの貴重な抽象である。」(出 隆、古在由重編 『哲学用語辞典』 84ページ)

マルクスがドイツ語の一般と特殊の語源について述べた個所に見田石介教授は、次のような注釈を付けておられる。

「『ドイツ語および北方語の *das Allgemeine* [一般] の意味するところは共同地にほかならず、そして *das Sondere, Besondere* [特殊] の意味するところは共同地から分離された個別所有地にほかならない、ということをあの世で知ったら、老ヘーゲルは何と言うだろうか? ……」(……) といっているが、共同体は、共有地からだけ成るのではなく、同時にその対立物である分割地もその欠きえない要因である。

だからこれら二つは共同体を形成する特殊なモメントである。しかしこの全体を包括し、この全体に意味をあたえるものは、共有地の方であるから、これがまた全体を代表するものとなり、それにしたがって全体も共同体と名づけられることになる。このように、ドイツ語の一般というのは……もともとそこに実在する特殊のモメントのうちで支配的影響をあたえるもののことだというのは、じつに興味あることである。」(見田石介 『資本論の方法』 193ページ)

66) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.206. 青木文庫 第2分冊 358ページ。

67) Karl Marx *Theorien* S.363. 青木書店 第1分冊 585ページ。国民文庫 第3分冊 183ページ。

68) 形式・形態をとまわらない本質・内容は存在しない。

69) Karl Marx 『諸結果』『マル・エン選集』 380ページ。国民文庫 34ページ。

Oct. 2010

生産的労働についての一考察

- 70) Karl Marx *Das Kapital* Bd. I. S.194. 青木文庫 第2分冊 343ページ。
- 71) Karl Marx *Ebenda* Bd. I. S.193. 第2分冊 341ページ。
- 72) Karl Marx *Ebenda* Bd. I. S.238. 第2分冊 403ページ。
- 73) Karl Marx *Ebenda* Bd. I. S.192. 第2分冊 339ページ。
- 74) Karl Marx *Ebenda* Bd. III. S.871. 第13分冊 1153ページ。
- 75) 一般の規定と特殊歴史の規定との関係では次のような理解も存在する。いずれも同意出来ない理論である。  
赤堀邦雄教授は次のように主張される。
- A 「生産的労働の形態規定は価値増殖に関する規定であり、実質規定は使用価値として物が生産されたかどうかを基準にした規定である。両者は全然別な規定なのである。」(『価値論と生産的労働』135ページ 傍線—引用者)
- B 「……生産的労働の資本主義的形態規定は、資本のために直接剰余価値を生産する労働、だけで十分で……実質規定(本源的规定)とは直接なんの関係もあるはずない。」(同上書 24ページ 傍線—引用者)
- C 「資本主義的生産的労働は、物的財貨生産によって剰余価値を生産することもあれば、サービス商品の生産によって剰余価値を生産することもある……本源的规定(=実質的规定)からいえば、前者は物を生産するので生産的労働、後者は物を生産しないので不生産的労働であるが、資本主義的形態規定からいえば、まったく区別する理由のない同種類の生産的労働なのである。」(同上ページ 傍線—引用者)
- 橋本 勲教授は言う。  
「問題は、サービス労働が一方の『一般的规定』からは不生産的であり、他方『歴史的规定』からは生産的になるのは何故かという点にある。」(「サービス労働の生産的性格」46ページ)
- 松原 昭教授は次のように主張される。  
「……国民所得を生産する生産的労働について問題となるのはサービス労働者の労働である。これは一般的に社会の再生産過程からみると不生産的労働となるにもかかわらず歴史的规定のうえでは資本家に利潤を取得させることのために生産的労働となる。」(『労働の経済学』44～45ページ)
- 崎山一雄氏は次のように言う。  
「……物質的財貨(財貨のミスプリ?—引用者)を生産しない、一般的意味では不生産的労働の範疇に属する労働のあるものが、資本主義的意味での生産的労働となる。」(崎山一雄「生産的労働と交通労働」117ページ 傍線—引用者)
- 馬場雅昭 『サービス経済論』41, 150～155ページ参照のこと。
- 馬場雅昭 『流通費用論の展開』33～35ページ参照。

### 参考文献

- 赤堀邦雄 『価値論と生産的労働』三一書房 1971年。
- 出 隆, 古在由重編 『哲学用語辞典—増補版—』青木書店 1961年。
- Karl Marx *Das Kapital* Dietz Verlag 1953 『資本論』長谷部文雄訳 青木文庫 1952年～  
*Theorien über den Mehrwert* Dietz Verlag 1956 『剰余価値学説史』第1分冊 青木書店 1969年。in *Karl Marx Friedrich Engels Werke* Bd.26. Dietz Verlag 1965 *Theorien* と省略。『剰余価値学説史』国民文庫 1970年～  
*Resultate des unmittelbaren Produktionsprozesses* 『直接的生産の諸結果』『マルクス・エンゲルス選集』第9巻 大月書店 1960年『マル・エン選集』と省略。『直接的生産の諸結果』国民文庫 1970年 『諸結果』と省略。  
*Zur Kritik der politischen Ökonomie* 『経済学批判』岩波文庫 1956年。  
*Lohnarbeit und Kapital* 1934 『賃労働と資本』岩波文庫 1984年。

- 河上 肇 『経済学大綱』上・中巻 角川文庫 1960年, 1961年。
- 崎山一雄 「生産的労働と交通労働」京都大学『経済論叢』第79巻第1号, 1957年。
- ソ連邦科学院哲学研究所 『哲学教程』合同出版 1965年～
- 橋本 勲 「サービスの労働の生産的性格」京都大学『経済論叢』第92巻第4号, 1963年。
- 馬場雅昭 『サービス経済論』同文館出版 1989年。
- 『流通費用論の展開』同文館出版 1999年。
- ヘーゲル 『小論理学』松村一人訳 岩波文庫 上・下 1961年 1972年。
- 松原 昭 『労働の経済学』
- 見田石介 『資本論の方法』弘文堂新社 1968年。
- レーニン 『哲学ノート』松村一人訳 岩波文庫 1960年 1966年。
- ローゼンターリ・シトラックス編 『カテゴリー論』寺沢・林・野中訳 下巻 青木書店 1970年。
- ローゼンターリ 『資本論の弁証法』飯田貫一訳 上・下巻 青木書店 1956年, 1957年。

(2010年7月9日掲載決定)